

西トップ遺跡の調査と修復

1 はじめに

西トップ遺跡における調査研究活動は、1993年に内戦後のカンボジア国内復興にともなう文化支援として始まった「アンコール文化遺産保護に関する研究協力事業」を引き継ぎ、研究所の国際文化支援事業の一環として事業を継続している。2001年からの第1次中期計画からは対象を表記の西トップ遺跡に定め、第2次中期計画までの10年間、考古班13回、建築班8回、保存科学班3回の現地調査をおこない、当該遺跡の構造・変遷・保存状況等の調査をおこなった。調査成果に関しては2011年に『西トップ調査報告』を刊行した。

調査途上の2008年5月に、中央祠堂東面の破風石材が40個あまり落下した。特に中央祠堂屋蓋部が不安定になり崩壊の危険性が増したため、APSARAと協議の上、足場材によって支持を組むことになった。足場材の組み立てに関しては、日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JASA)の全面的な協力を得、2008年12月に今見るような足場材による支持が完成した(図10)。その後、修復に向けての検討を研究所内外で重ね、第3次中期計画として、2011年から2015年にかけての5年間で3祠堂と東テラスの修復をおこなうことが決定した。

2 修復計画策定の経過

修復計画の策定に関してはAPSARAと協議をおこなうとともに、日本を中心とする各調査チームとの意見交

換を通して修復基本計画の策定作業を2009年から2010年前半にかけておこなった。併行して建築班による図面の作成もおこなわれた。

2010年度後半には調査に参加した建築班、考古班、保存科学班、総務班を交えた会議をおこない実際の修復計画の策定にあたった。2011年度に入り第3次中期計画の開始とともに、研究所内で検討した修復計画をAPSARAをはじめとする地元当局からの意見をとりいれながら、具体的な修復計画案の作成をおこなった。同年12月の国際調整委委員会ではこの修復計画案をアドホック委員会に諮り、いくつかの提案を受けた。

2012年2月には如上の経過を経て指摘されたいくつかの修正を加えて仕上げた修復計画案を、研究所内で再検討をおこない最終的な修復計画案が了承された。その後2012年3月8日の起工式を経て南祠堂の解体から実際の作業が始まった(巻頭図版1)。



図10 南祠堂現状写真(2012年3月:南から)



図11 現状図(東から)

3 解体修復案

基本方針 まず解体の範囲としては、中央・南・北の3祠堂、および東テラスを対象とする。全体を一度解体し、近くで仮組をおこない部材の欠損や収まりをチェックする。さらに石材全体の強度変化や不足石材の検討をおこなった後、再構築をおこなう。再構築に際しては基壇部の発掘調査をおこない、基壇内部の構造や埋納物の調査をおこなう。その後必要であれば基壇の強化措置を施した上で再構築をおこなう。

南祠堂 最初に南祠堂の解体仮組をおこなう。南祠堂は大きく南に倒れ込んでいるが、躯体部の北面と東面がほぼ当初位置に残存し、解体から仮組に至る手順を構築しやすい。また周囲の南散乱石材を移動すれば容易に作業スペースを確保できる。このためまず南祠堂の解体仮組を先行させて、全体の作業手順を確認し、北祠堂・中央祠堂と徐々に状態が悪く解体仮組の困難な対象へと作業を進めていくこととした。

南祠堂はまず躯体部の北面と東面に番付を施し解体する。その過程で躯体部内側の落下石材も徐々に取り除くことになり、落下石材の同定から崩壊した躯体部南面と西面の復元を目指す。解体した南祠堂の石材は南側の仮組場で順次仮組をおこなう。

躯体部の解体終了後、上成基壇と中成基壇の解体仮組をおこなう。この後、下成基壇内部の発掘調査をおこなうとともに下成基壇外装石材の原位置での修復をおこなうとともに、順次再構築を進める。

北祠堂 南祠堂の解体仮組・再構築終了後、北祠堂の解体仮組を開始する。北祠堂は躯体部南西隅の構造材だけがほぼ当初の構造を残すのみで、後の石材は躯体部内部に崩れ落ちるとともに、残存石材の量を見ると、1920年代のフランスによる周辺散乱石材の撤去時に、祠堂内部の崩落石材の多くが北側に散乱石材として移動されたのではないかと推定される。しかし現時点では北側散乱石材の中から北祠堂の躯体部に復元設置できる石材を確認することは困難な状態であり、石材の探索と旧位置への復元設置の努力は続けるものの、北祠堂の躯体部は現状以上に大きく復元仮組することは困難と考えられる。ただし、南面と西面に足部が一部残存する扉部の釈迦立像浮き彫りは、西面は上半身が保存事務所に保管されると

ともに、南面頭部は中央祠堂内部に移されており、いずれも復元は可能である。中成基壇の解体終了後、下成基壇内部の発掘調査をおこない、下成基壇外装石材を原位置に戻した後、基壇土を強化し再構築をおこなう。

中央祠堂 屋蓋部、躯体部、上成・中成基壇部の3部分に分けて順次解体仮組をおこなう。中央祠堂では現基壇内部に先行するラテライトを組んだ下層基壇が隠れており、屋蓋部と躯体部の解体仮組が終了した後、時間をかけて下層基壇の調査をする必要がある。この調査において下層基壇の構造だけではなく、石材の強度等の調査もおこない、その結果を待って下層基壇の修復・強化の方針を決めるとともに再構築の手順を考えることになる。

4 再構築後

3祠堂の解体・仮組・再構築終了後に東テラスの外装石材を原位置に復し建築部分の修復を終える。修復終了後は現地修復事務所の建物を利用した展示施設の充実や、仮組コンクリート基盤を利用した散乱石材の展示施設の整備など、関連する展示施設の整備をおこなう。加えて周辺の園路整備、サインの充実など、来訪者に対する便益確保のための整備をおこなう必要がある。

さらにはこれまで観光客等の来訪が少なかった当該遺跡を中心とするアンコール・トム西側の観光開発と遺跡順路の整備を、本修復作業の一貫として位置付け、APSARA と協議しながら周辺の整備にも協力していく必要があると考える。

(杉山 洋)



図12 南祠堂修復後(東から)